



「戎橋」

たにへいべん

いま、古い戎橋が取り壊されて、現代的な橋に架け替えられている。元の戎橋はアーチの形をしていて、材質はコンクリートで出来ていた。アーチという構造は大変丈夫で長持ちする。古代ローマ時代の石造アーチ橋が今でも使われていることからわかる。

石造アーチは人間が運べる程度の大きさの石のブロックを積み重ねてアーチ型の橋にしたもので、石と石の接触面はただ接触しているだけで、特に接着剤が使われているわけではない。接触面は自らの重さによってほどよく馴染むのである。この種の石造アーチ橋は、科学技術の進歩とともに近代的な橋に取って代わっていく。

日本では明治になるまでもっぱら木の橋の時代が続いたのは、固有の文化・風土によると考えられる。石造アーチが江戸時代後期、九州で普及し始めて明治初期ごろまで続くが、明治の近代化と共に西洋型の技術による橋づくりが主流になってくる。

当初は鉄の橋だったのが、セメントが発明されコンクリートの橋ができるようになる。

昔の石積みのアーチの優美さがコンクリートの橋に代わって力強さが加わった。

コンクリートの橋は全体が一体化していて大変強い。しかし土台などが少しゆるむと割れ目が一カ所に集中して現れる。石積みの場合には全体の変形が一つ一つの隙間に分散されて非常に目立ちにくいのである。コンクリートの場合割れ目が出来ても壊れるわけではない。材料の性質として仕方のないことで、割れ目が目立たないように補修してやればよい。

道頓堀と心齋橋筋の交差点は一等地で、明治11年という比較的早い時期に鉄の橋になった。それがまちの急速な発展にともない、幅が広くて堀を一またぎで渡るコンクリート製のアーチになったのは大正14年のことで、平成17年で丁度85歳になったことになる。先代の鉄の橋が47歳という短命であったのに比べると、大阪の橋としては大変長寿で、このままいってくれば長寿橋の代表として大阪名物の肩書きに箔がついたことだった。

話を現在の戎橋にもどしたい。

3、4年前の新聞で、戎橋の欄干を掃除している子どもの写真が載っていた。戎橋筋だったか心齋橋筋だったかの商店街の店主らの企画で他府県からの生徒を呼んで商店業務の体験をしてもらい、その思い出に橋の掃除奉仕をしたということだったと記憶している。橋を洗うことによって思い出を作るといふ、何とすばらしいアイデアではないか。森に入って木の肌に触れるとその木と魂を通わせることができる、という人がいるそうだ。樹木も生き物だから魂との会話ができるというのはわかるような気がする。

では無機質の物体だったらどうなのだろう。

3年ほど前から大阪で「橋洗い」というイベントが始まっている。洗剤を橋に染みこませるだけでなく、洗うその手のひらを橋の肌に密着させて、心を染みこませて、橋と魂

を共にすることが出来れば、橋洗いという作業が大阪の文化の根になっていくに違いない。

心齋橋筋の商店体験をしたあの子どもたちの手のぬくもりを覚えている欄干は、今はもうない。

(谷平 勉氏プロフィール)

谷平先生と私は昭和34年、大阪市立大学工学部土木工学科に入学したところからのお付き合いです。よくご本人から聞いてみたところ、私は先生と住吉高等学校も同窓で先輩と言うことでした。先生は現役で合格されたのです。先生は、大学の卒業研究でも構造力学研究室で論文を書いたと思いますが、とにかく理解力の早い男でした。彼は住吉区の西部に住んでいて、私の家とそう遠くなかったこともあり、故藤澤政夫氏等とマージャン仲間であったこともありました。彼は、このグループでもいつも勝ち組だったこと、藤澤と私は、よく教えてもらったり、勝ち点の計算も先生にやってもらっていたことを思い出します。

卒業後、私は仕事上で、塑性設計にかかわる問題があり、困り果てた挙句近畿大学の研究室を訪問したことがありましたが、「まさに大学の4回生で聞いた構造力学そのものじゃないか、」と先生に笑われました。そのとき本当に「彼はえらくなつたな、」と思いました。

しかし、先生も遠からず後進に道を譲られることでしょう。その節はもっとCVVを引っ張って盛り上げてくださることを期待しています。

廣海泰次郎